

# 津賀



**国**道381号から左眼下に茅吹手沈下橋（新谷橋）を望む。沈下橋へと下りていく道付近から津賀地区となる。右の旧道へ入る所に地区の境を示すお札が立っている。国道の下り坂を下りきった所の短いトンネルを抜けると集落が現れ、集落の終わりの右手に産土神である河内神社。そして四国電力の発電所。さらにしばらく行くと北の川に出る。ここに消防署がある。この消防署までが津賀ということになる。津賀というと「国道の両脇にまとまっている小さな地区」と思い込

みがちであるが、実は意外と広い。集落背後（東方）の山の向こうは奥行きがあって、大正地区の木屋ケ内や西の川と接している。ただ、そちらへ抜ける道はない。

隣の茅吹手地区と同じく、津賀地区も昔から火振り漁が行われてきたが、今は火振り漁をやる人がいなくなったらしい。ただ、このエリアは、専門誌やインターネット上でも取り上げられる、友掛け（友釣り）の絶好のポイントで、シーズンになれば多くの太公望たちがやってくる。

田畑にする平地が少ない地形ゆえ、津賀の人々もまた山の仕事で生きてきた。地区に住む80歳を越えるご婦人は「20歳でここにお嫁に来てから、私も北の川の奥の山まで自転車で行って、伐採から苗木の植え付けまでやっていて、食べていくのに一生懸命で、臨月になっても行きよって、さすがに営林署の人に心配された」と話してくれた。

さて、江戸期の記録に「家数十二」とある。現在も10世帯ほどの集落であるが、地区史上最も世帯数が多かったのではないかと思われる時代がある。その時代は40世帯はあったという。大正時代から建設が始まった津賀発電所は、戦前に運用は始まったものの、一時中断を経て、戦後の昭和26年になって本格稼働された。これに伴い、津賀地区では四国電力の社員住宅が建設が



集落の境に建てられたお札。

進んだ。国道の南側にビッシリと並んでいたという。発電所の敷地内には独身寮もあったらしい。また設備修理を担う工場もあった。それら四国電力の施設の中には、なんと理髪店があったというのだ。もともとこれは、理髪店の椅子や各種道具類が完備されただけの、いわば「セット」で、理髪師は定期的に出張してくるというシステムであった。

40世帯あれば、子どもの数もそれなりにいたので、それはそれは賑やかだったそう。旧暦4月の「地蔵まつり」の時などは、河原に集まり、相撲をとったり、宝探しゲームに興じたり、またお菓子やお餅を配ったりして、子ども達のみならず、住民をあげて楽しんだ。

しかし、1970年代に入り、発電所の様々な管理・コントロールなどが窪川で行われるようになると同時に、社員たち家族もこの地から離れ、社宅

もあつという間になくなった。そして津賀の集落は、元の10世帯ほどの小さな集落に戻ったのだという。当時を知る方が、遠くに見える河原を指差しながら「あの辺りで宝探しをやったがよ」と懐かしそうに語ってくれた。



## 町のうごき

| (3月31日) | 人口      | 前月比 | 出生       | 死亡     | 転入   | 転出     |
|---------|---------|-----|----------|--------|------|--------|
| 男       | 7,473   | -39 | 男 2      | 15     | 54   | 80     |
| 女       | 8,129   | -45 | 女 4      | 13     | 47   | 83     |
| 計       | 15,602  | -84 | 計 6      | 28     | 101  | 163    |
| 世帯数     | 8,121   | 8   | (3月中の届出) |        |      |        |
| 窪川地域    | 11,093人 |     | 大正地域     | 2,151人 | 十和地域 | 2,358人 |